武蔵野日曜聖書講筵

キリスト者の艱難

――テサロニケ前書第3章――

１９９２年10月18日
小池辰雄

艱難に信仰で勝て　宗教的な戦い　信仰上の戦い　御霊の力で楽勝　愛を受けとった信　歓喜は神讃美に

【テサロニケ前3】

1この故に、もはや忍ぶこと能わず、我等のみアテネに留ることに決し、
2キリストの福音において神の役者（えきしゃ）たる我らの兄弟テモテを汝らに遣（つかわ）せり。
これは汝らを堅うし、また信仰につきて勧め、3この患難（なやみ）によりて動かさる
る者の無からん為なり。患難に遭うことの我らに定まりたるは、汝等みずか
ら知る所なり。4我らが患難に遭うべきことは、汝らと偕に在りしとき預じ
め告げたるが、今果して汝らの知るごとく然（し）か成れり。5この故に最早われ
忍ぶこと能わず、試むる者の汝らを試みて、我らの労の空しくならんことを
恐れ、なんじらの信仰を知らんとて人を遣（つかわ）せり。6然るに今テモテ汝らより
帰りて、汝らの信仰と愛とにつきて喜ばしき音信（おとずれ）を聞かせ、又なんじら常に
我らを懇（ねんご）ろに念（おも）い、我らに逢（あ）わんことを切に望み居るは、我らが汝らに逢わ
んことを望むに等しと告げたるによりて、7兄弟よ、われらは諸般（もろもろ）の苦難（くるしみ）と
患難（なやみ）との中にも汝らの信仰によりて慰安（なぐさめ）を得たり。8汝等もし主に在りて堅
く立たば我らは生くるなり。9汝等につきて我らの神の前によろこぶ大なる
喜悦（よろこび）のために如何なる感謝をか神に献ぐべき。10我らは夜昼祈りて、汝らの
顔を見んことと、汝らの信仰の足らぬ所を補わんこととを切に願う。
11願くは我らの父なる神みずからと我らの主なるイエスと、我らを導きて
汝らに到らせ給わんことを。12願くは主、なんじら相互（あいたがい）の愛および凡ての人
に対する愛を増し、かつ豊かにして、我らが汝らを愛する如くならしめ、
13斯して汝らの心を堅うし、我らの主イエスの、凡ての聖徒と偕に来りたも
う時、われらの父なる神の前に潔くして責むべき所なからしめ給わんことを。

●艱難に信仰で勝て

テサロニケ前書第3章を「キリスト者の艱難」と題してお話します。

1この故に、もはや忍ぶこと能わず、
パウロはテサロニケの人たちに会いたくてしょうがない。けれども、いつもいろんな事に妨げられて行かれない。それで、もう我慢するわけにいかない、ということが、「忍ぶこと能わず」ということです。

我等のみアテネに留ることに決し、
この「我等」というのは、テモテはパウロのお遣いに行ってますから、これはシラスが一緒だったんでしょう。それで「我等」と言った。よくペレヤやテサロニケの方に、テモテやシラスをお遣いにやったことがある。このテモテが今ここに残っているわけです。これはパウロはアテネから手紙を書いているわけですから。コリントにまた行きますけれども。

キリストの福音において神の役者(えきしゃ)たる我らの兄弟テモテを汝らに遣(つかわ)せり。これは汝らを堅うし、また信仰につきて勧め、
「兄弟」という言い方、或は、他の写本には「シュネルゴス」「同労者」という言葉がある。この福音のために皆さんが一緒にやっているのも、広い意味ではみなこの「シュネルゴス」です。複数は「シュネルゴイ」。「兄弟」という言葉はもっと親しい言葉です。

3この患難(なやみ)によりて動かさるる者の無からん為なり。患難に遭うことの我らに定まりたるは、汝等みずから知る所なり。
この3章には、「患難」という字が、或はサタンの「試み」とかいう字が何回も出てきます。そして、

「艱難に対して信仰で勝て」
という。クリスチャンは当然、艱難に逢うことになっている。サタン的な誘惑もあるし、いろんな意味の妨げや文字通りの艱難もある。ご存知のとおりだ、と。

4我らが患難に遭うべきことは、汝らと偕に在りしとき預じめ告げたるが、今果して汝らの知るごとく然(し)か成れり。
自分で体験する如く、ですね。大体、

「あれはギリシアの神々に反する」
と言って、福音にかかってくるのと、それから、ユダヤ人のユダヤ教が、

「キリストを信ずるのはけしからん」
というのと、二通りあるわけです。それが信仰上の問題でひっかかってくる。それが艱難です。旅や何かでいろんな事にでっくわすのも艱難ですけれども、この場合はむしろ、そういった、魂の世界の争い事です。

5この故に最早われ忍ぶこと能わず、試むる者の汝らを試みて、我らの労の空しくならんことを恐れ、なんじらの信仰を知らんとて人を遣(つかわ)せり。
この「試むる者」という言い方が、これは単数で、定冠詞がついているから、「サタン」です。サタンの内容はいろいろになりますけれども。「試み」は、試すような試みと、それから、

誘惑の意味と、両方の意味をもっています。

「我らを試みに会わせたもうな」

と、主の祈りの中にもありますけれども。

「せっかく、福音を伝えて、固めてきたのだけれども、それに負けてはダメだ。そしたら、空しくなる。大丈夫かね」と。

●宗教的な戦い

6 然るに今テモテ汝らより帰りて、汝らの信仰と愛とにつきて喜ばしき音信を聞かせ、

「あなた方が大丈夫、戦っているということを聞いて安心した」と。

又なんじら常に我らを懇ろに念い、我らに逢わんことを切に望み居るは、我らが汝らに逢わんことを望むに等しと告げたるによりて、

「お互いに会いたくてしょうがないという気持は同じだねぇ」というわけです。非常にテサロニケとは仲がいいわけです。

7 兄弟よ、われらは諸般の苦難と患難との中にも汝らの信仰によりて慰安を得たり。

「こっちもいろんなことにでっくわすけれども、お前たちが勝っていることで、慰められるよ」と。

8 汝等もし主に在りて堅く立たば我らは生くるなり。

「友人の信仰的な勝利はまた自分たちにも力となり生命となる」というわけです。

9 汝等につきて我らの神の前によろこぶ大なる喜悦のために如何なる感謝をか神に献ぐべき。

「どう感謝していいか分からない」と非常に喜んでいる。この喜びは勝利の喜びです。信仰上の喜びです。

10 我らは夜昼祈りて、汝らの顔を見んことと、汝らの信仰の足らぬ所を補わんこととを切に願う。

こういう宗教的な戦いの世界は――我々の今の現実はそういった戦いが余りない。だから、その切実さが我々にはピンと来ないんですけれども――本当に彼らは、死ぬか生きるかの戦いの中にいますから、こういう言葉が出てくる。だから

「本当に会いたい」

というのは、お互いに力を合わせて、力を交換するような、またパウロは力を与えるような、そういう気持がある。カトリックが日本に伝わった頃には非常に迫害があったから、あのキリシタン史をみると、非常に戦いがあって、殉道の人がかなりいたわけです。明治の初年頃のプロテスタントも、多少はあったけれども、あのカトリックの戦いが一番激しかった。

11願くは我らの父なる神みずからと我らの主なるイエスと、我らを導きて汝らに到らせ給わんことを。

と、また祈っている。

12願くは主、なんじら相互（あいたがい）の愛および凡ての人に対する愛を増し、かつ豊かにして、我らが汝らを愛する如くならしめ、

愛にも二通りある。お互いに愛することと、一般の人を誰でも愛すること。二通りあるということは、相手が二通りで、愛そのものは変わりがない、というわけです。

13斯（かく）して汝らの心を堅うし、我らの主イエスの、凡ての聖徒と偕に来りたもう時、われらの父なる神の前に潔くして責むべき所なからしめ給わんことを。

初代教会の人は再臨を非常に近く望んでいるところの現実です。

「もうじきキリストがいらっしゃるから」

と。「聖徒」という言葉の中には「天使」と、先に逝った「信徒」たちと両方をひっくるめて「聖徒」と言ったらしい。

「そのように救われたから、そのように実存していこう」

と。こういうのが3章の大体の内容です。

●信仰上の戦い

パウロが言う通り、いろんな艱難があるわけです。今は、いわゆる迫害はないにしても、戦いはある。戦いというのは信仰上の戦いです。信仰上の戦いをいい加減にしていると、これはうまくない。一つの例は、やはり日曜日は、いろんな差し支えが都会の生活にはありますからどうのこうのと言うわけではありませんけれども、

「人が来たから集会に行けません」

なんて、そんなのはダメです。

「日曜の午前は自分は集会に行くことになっているから、申し訳ないが今日はお相手できません。よかったら、一緒にいらっしゃい」

とか、とにかく、そういう信仰上の戦いはしなければダメです。それから、私たちは、いわゆるお説教なんか私はしているわけではないので、この集会では、お互いに語るも聴くも同じこと、キリストの力に与かるのですから、多少からだの調子が悪かったら、むしろ来たほうがいい。来れば治ってしまう。そういうことで、我々は信仰の戦いをはっきりやっていかなくてはいかん。

戦いには、自分を鍛える意味と、人を助ける意味と二通りあります。戦いの本当の内容は、神・キリストとの交わりを深くすることと、また、人を助けること。これがその戦いの内容です。

「神・キリストと深くなる。人を助ける」

そのようなことは、パウロはここで言ってない。

「信仰、信仰」

と言っているけれども、これは何によるかというと、

「聖霊の力」

による。私はここでどうしてもその聖霊のことを言いたいわけです。「信仰、信仰」とパウロは言っているけれども、これは「御霊の力」です。御霊の力は、むしろ、艱難に遭えば、逆比例して力強くはたらきたもう。それを体験するまでは、まだ本ものでない。聖霊の愛というものは最も強い。戦いは人を救ったり、自分をキリストと一緒にしていよいよ救うことですから、どっちみち、「戦いは救い」なんだ。

キリストの愛を聖霊をもって受けとる。聖霊の愛でもって、相手を、敵をも愛する。愛するというのは、敵をも担ってしまう、敵をも救ってしまう。だから、愛は単なる感情ではなくして、実力なんです。聖霊がその実力をもっている。聖霊の実力がなかったならば、

「自分の信仰、信仰」

なんて言ったってダメだ。大体のクリスチャンがみんな、「信仰は自分のものだ」と思って、

「自分の信仰はまだ薄いものですから、もっと強くしなければ」

と、自分の信仰を問題にしている。そんなものは要らん、「信仰」なんか。

だから、私は「絶信」と言っている。「無」と言っているんです。自分なんか投げ出している世界は、上からキリストの信が、聖霊の愛が、聖霊の力がやってくるから、それが信仰の現実なんです。だから、楽なんです。

「楽で力がくるから、あり難くてしょうがない」

と、こういうわけです。力む必要はないんだ。頑張る必要はない。

「頑張れ、頑張れ」

とよく言うけれども。この消息が案外つかめてない。熱心な祈りという、人間的な熱心さはダメです。

「エホバの熱心これをなす。キリストの熱心これをなす」

という。上からくる熱心を受けとることが本当の熱心なんです。だから、

「無即無限無量」

と、私が言っているのは、その角度です。

「求めよ、さらば、与えられん」

という。いや、求めるよりも、与えようとしている力の方が強い。

「求め方が少ないから与えられません」

ではない。「求め」とは何でもない。「自分を投げ入れる」ことです。自分を投げ入れれば、必ずキリスト自身が与えられる。具体的にその内容はいろいろなことになりますけれども、根元はキリスト自身を頂くことなんです。そうすると、力が来る。

●御霊の力で楽勝

パウロが一生懸命で、艱難に打ち勝つようなことばかり書いているけれども、これは、

「艱難はいくらでも来なさい。聖霊が助けるよ」

と、何故、パウロは書いてくれなかったか。

「信仰、信仰」

と言うと、そうすると、信仰で力んでしまう。どうも、パウロのこの書き方には、私はそういうところはちょっと不満なんだ。こういうのを普通のクリスチャンが読むと、

「さぁこれは大変だ。艱難に勝つために信仰を強くしなければ」

と、大体そう思う。くたびれるよ。聖霊ぬきになってしまう。聖霊というと、ただ「三位一体」なんてことばかり言っている。みんな観念なんだ。私たちが

「使徒的信仰」

と言っているのは、どのような烈しい内容であるかということを、皆さんはいよいよ自覚していただきたい。

「何でもござれ」

と、御霊の力で逆にやっつける。反比例するから。艱難が大きければ、御霊は反比例して強くはたらきたもう。

クリスチャンは本当に福音を生きていくためには、いろんな意味でもって、艱難が必ずある。現象的には小さいようにみえても、

「ここではちゃんとはっきりと自分の線を行きなさい」

という時に、行けないようだったら、それはやっぱり負けているわけです。それが、力まないで御霊の力で楽にできるから。

どうぞ、皆さん、その楽にできる御霊の力をいよいよ体験してください。そして、相手が参ってしまうです、この御霊の力の愛の世界は。

「そうですか、それでは私も一緒に行きます」

「それではいらっしゃい」

と、お客さんを連れてきたらいい。

「今日は、客が来たので集会に行けなくなりました」

なんて、冗談じゃない。

公の仕事のためにどうしても日曜を休むのは仕方がない。日本では公の仕事を日曜にやって困る。日本人は日曜は宗教的な生活を普通はしないから。教会に行ってらっしゃる方はまだいいけれども。仏教でもやっているのかね。仏教だってしっかりやったらいい。偉大な坊さんたちがたくさん出たのに、何をしてるんだ。

クリスチャンの艱難は、キリストが、

「己が十字架を負え」

と言われた。

「己が十字架を負わない者は私の弟子ではない」

と。キリスト者ではない、と。「十字架を負え」というのは、

「いろんな艱難をしょってこい」

ということです。それは負えるんです、聖霊の力があるから。聖霊の力がなかったら負えない。そして、負うと、そのことがキリストの栄光になる。キリストの栄光になり、神の讃美となる。だから、どういうことが起こっても、究極的にはみな神讃美で、讃美歌を歌っているようなものだ。

●愛を受けとった信

「信仰と愛」「恩恵（めぐみ）と真実（まこと）」

とかいう言葉がよく出てきます。「信仰と愛」というけれども本当は愛が先なんです。神・キリストの愛を受けると、我々はこれを信じ受け、とる――信じ仰ぐのではない――「信受」だ。仏教の方にも信受という言葉がある。私はあの「仰」の字はあまり好きではない。初めは仰いでいたかもしれないけれども、いつまでも仰いでいてはダメなんだ。信受です。だから、

「愛信」

なんです。愛が恵みなんです。キリスト・神の愛が恵みです。これを受けとるのが信です。そして、愛を受けとるから、この信が同時に愛なんです。この愛を信で受けとると、この愛が横に流れていく。人を助ける愛になる。神さまに助けられるのが、愛を受けとった信の世界です。そうすると、今度は、人を助ける愛になる。具体的に助けなければしょうがない。感情で愛したってどうにもならない。私は無教会で

「信仰、信仰」

と散々言われて、あれは大きな間違いだった。

「信仰のみ」

と言って、あれは観念だ。

女の人も戦ってくださいよ。日本では、女の方の戦いが、十字架が多い。なかなか旦那が信仰に入らない。どうして、そう固いのだろうね。死に至るまで柔軟な心をもっていなければダメなんです。柔軟心というけれども。

私は立場なき人間ですから。頭場はもっている。キリストに吊るされている。だから、梵鐘（ぼんしょう）なんです。私を打てば、ガーンと響く。福音の響き。

「私の立場は…」

なんて、立場や主義はみんなダメです。立場や主義をもつ人は、或る限定したものしか言えない。だから、ゲーテは、

「主義を越えろ。イズムを越えろ」

と言った。さすがはゲーテです。宇宙的な魂だから。あの偉大さはそういうところから来る。なぜゲーテが偉大かということを、本当の意味では、ドイツ文学者がよく知らない。

３章のパウロを読みながら、パウロを乗り越えた気持で私は語りました。もちろん、パウロは御霊の魂ですから、パウロ自身は素晴らしい。けれども、パウロのこの３章の言葉はあまり感心しない。これでは、しまいには、テサロニケの信者たちは苦しくなる。

「御霊は生きているか」

と、聖霊のことをはっきり言わなくては。どうも、パウロは少し枝葉の事ばっかり書いているね、これけしからん。

●歓喜は神讃美に

ベートーヴェンは作曲すれば――歌は曲の中には普通はないんだ――ところが、『第九』をやっているうちに、どうしても最後にあの合唱を言わなくてはいられなくなった。それで、あの合唱が入ってきた。やむにやまれないんだ、あの合唱は。大讃歌です。

ダンテはあの苦難の中で『神曲』を書いた。しかも彼はもちろん『神曲』とは言わない。『喜曲』と言った。喜劇、『コメディア』と言っている。あの苦難をした人が『喜曲』と言っている。チャップリンもそうなんです。非常に苦難を通ってきて、最後に凄いことになった。最後はやはり喜びの世界です。あの喜劇の中に悲劇的要素がかなり入っています。けれども、喜びの世界に人を導く。それがチャップリンの願いであった。

ベートーヴェンが生命を終わる三日前に、

「プラウディーテ　アミキ、コメディア　フィニタ　エスト」

「友人たちよ歓呼してくれ、喜劇は終わった」

と言った。ベートーヴェンの生涯は喜劇どころではない。それをやっぱり「コメディア　フィニタ　エスト」（喜劇は終わった）と言った。

艱難を本当に体験した魂は、どんなことでも最後は歓喜、喜びをうたう。それを告白する。これが本当の勝利者です。ミルトンが『パラタイス・ロスト』（楽園喪失）を書いた。けれども、『パラタイス・ロスト』の終りの方を見ても分かりますけれども、このロストが本当のロストの世界なんだ。それではどうも気がすまない。そこで、キリストがパラダイスを取り戻してくださったと、あの『パラダイス・リゲインド』（楽園回復）という詩を後から書かざるを得なかった。ミルトンも失明の詩人ですから。

どのような事があっても、歓喜の、喜びの叫びを、歌を、告白をするのが本当の世界で、その喜びは神讃美です。シラーの詩は素晴らしいけれども、神讃美というところの性格においては、ちょっと欠けるけれども、まぁしかし、ある程度は入っています。

ゲーテの『ファウスト』の最後は、

「地上でもって達成されないことがここでは達成されたぞ、ここでは成されたぞ」

と言って、最後の完成の喜びをやっぱり挙げているわけだ。「神秘の合唱」というところです。だから、人生の終りに――日本語でいえば「万歳！」だよ、「万歳、ハレルヤ！」です――その気持で我々は終わらなくてはしょうがない。だから、私が仆れたら、

「万歳！　ハレルヤ！」

と言ってくれなければ。

「私が仆れたら、喜びをもって送ってくれ。歓呼の声をあげてくれ」

と、ブラウニングもそう言った。そういう意味で、神の来たるべき国を待ち望むところの人たちは既に、

「天国は汝らのうちにあり」

だから、天国をいただいている私たちが喜びの声、希望の叫びをあげないでいられるか、というわけです。だから、もうくよくよする必要はひとつもない。いろんな事にでっくわせば、逆に力がくるから、あり難くてしょうがない。聖霊ぬきだったらダメですよ。その土台は、完全に贖われている、十字架が土台です。

とにかく、皆さん、いろいろな戦いが、試みがありますが、それに楽に勝ってくださいよ。楽に、御霊の力でね。しょげることはひとつもない。

「どうも少しスランプで…」

なんて、何がスランプだ。私はそんなものは知らないんだ。本当ですよ。私みたいな生まれつきの弱虫の泣き虫がこういうように強くされてしまって、これはどういうことかと自分でも思っている。

法然、親鸞なんていうのは、その角度で素晴らしい器だね、やっぱり。禅宗は困るんだ、本当は。くたびれるよ、禅宗は。聖道門というやつは。一生懸命で修行しなければならない。坐禅を組んだりね。坐禅なんかいらないんだ。

勝海舟という人はでっかいね。西郷南洲を相手にできるのは勝海舟だけ。あの最後の、江戸の談判のときに、西郷さんが来るというので、勝海舟は喜んで、寝て待っていたという。「あれなら大丈夫だ」というわけで。徳川側の最大の人物は勝海舟です。今の政治家に、西郷だの勝だの吉田松陰だの、そういう魂がいない。あれを薬にして飲んだらいい。全く情けない、この日本は。藤井先生が、

「日本よ、滅びよ」

と言ったが、もう滅びつつある。「滅びよ」と言わなくたって、もう精神的に滅びつつある。一番ダメだ。教育がダメ、政治がダメ。一番大事なのは、本当は教育なんだ。私は詩の中で教育論を展開するから。